

隠れたリソースの 前景化

につながる

アート・コレクションと 展示のコンテクスト

の理論と実践

芸術系 准教授 寺門 臨太郎

元来アートは機能的装置に美的価値を付加した造形物や考え方だった。コレクションと展示は、元来のあり方から対象を切り離し、新たな文脈と価値の付与行為である点において、リソース前景化の実践的手法といえる。

アート・コレクションと展示をめぐる美術史研究

1. アート

「アート art」は元来、人が自身のまわりを囲む「自然 nature」のなかに理想形をみだし、それを模倣する高度に洗練された「術 art」だった。自然という状態の対極にある「人工的 artificial」ということばは、そのことを端的に示している。



ローマのシステーナ礼拝堂(16世紀初頭)ミケランジェロの描いた天井画と壁画は聖書の世界を壮大に視覚化している。

2. コレクション

アートは洋の東西を問わず宗教に奉仕する道具であり、俗なる領域にいる人びとを神のいる聖なる領域へといざなう導入装置だった。そうしたアートを元来の機能や定位置から引き離し、あらたな意味を与え、あらたな場に移動させるのが「収集＝コレクション collection」という行為である。

3. アート・コレクション

近代的なアート・コレクションの始まりのひとつは、15世紀のイタリア・ルネサンスにある。フィレンツェのメディチ家に代表される新興都市商人など、古代ローマの遺物や遺品を発掘したキリスト教の人々は、遠い昔の異教徒たちが残した優れたアートや同時代の画家や彫刻のパトロンとなり、美術作品を収集と「鑑賞」という行為の対象にしはじめた。

4. 驚異の部屋

17世紀のネーデルラント(現在のオランダとベルギー)では異文化圏から伝来した自然・人工のあらゆるモノが「珍品 curiosity」として収集され、「驚異の部屋」と呼ばれた展示室で自国や自分個人の権力や経済力 power を他者に誇示する道具として利活用された。



ダーフィット・テニールス《大公レオポルト・ウィルヘルムのブリュッセルのギャラリー》1640年 油彩、カンヴァス 96×128cm シュライスハイム州立美術館蔵

5. ミュージアムとアート・コレクション

王侯や貴族が形成したアート・コレクションは、ごく限られた人びとの目にしか触れることがなかった。近代の社会構造や形態の変化にともない、かつてのプライベートなコレクションはミュージアム museum という仕組みと器に取り込まれ、「公共財」という新たなコンテクストの中に置かれることになった。フランス王家のコレクションが革命により共和国政府に摂取され、ルーヴル美術館の土台となったのはその代表例である。



ルーヴル美術館
フランス王家の旧ルーヴル宮を使い公共財となったアート・コレクションを展示している。

6. 大学アート・リソース

筑波大学には600点超のアート・コレクションがある。芸術系研究組織では、それら物的資源に人的資源(アーティストやデザイナーとしての教員・学生)と環境資源(展示施設を含むキャンパス空間)をあわせて「大学アート・リソース University Art Resources」と位置づけ、美術史学を研究領域とし、なおかつ美術館勤務経験をもつ複数教員がコア・メンバーとなり、管理実務と研究教育事業の実践にあたっている。



筑波大学ギャラリー(つくばキャンパス大学会館内)
筑波大学アート・コレクション 常設展示室
20世紀前半にパリで活躍した日本人画家を代表する藤田嗣治(レオナルド・フジタ)の典型的な裸婦像もある。

7. 個人コレクションから 大学の研究教育資源へ

大学が寄贈を受けた実業家の個人コレクション200余点は、そのアート・コレクションの中核を形成する。個人コレクションのアートは、大学という組織環境に組み込まれることによって、新たなコンテクストに据え置かれることになった。個人が自身の嗜好を満たす目的で収集したアートが、大学という研究教育組織のコレクションとなることで、公共財としての意味を獲得し、新たな価値を生み出すことになっている。アート・コレクションとその展示の理論は、隠れたリソースに価値を与え、前景化する手法にヒントを与える。

Difference

アートやそのコレクション形成をめぐる美術史研究に明確な社会的意味づけをおこなうことで、趣味や嗜好の範疇にとどまりがちだった研究の成果と方法の有為さを示すことが可能となる。